

学校の特色を生かした取組
テーマ

ほうじゃく
～「宝積」の心をもったひとづくり～

宝積：人に尽くして見返りを求めない（第19代内閣総理大臣原敬の教え）

【活動の重点】

- (1) 新設校として、地域や家庭との連携を図ること。
- (2) 新設校として、校訓「宝積」に向けた児童の行動の在り方を考えること。
- (3) 新設校として、学校の教育方針の啓発を図り、まなびフェストの方向性を家庭・地域との共同認識に立って推進していくこと。

【復興教育の視点】

- (1) 地域・家庭・学校の連携による「スマイル・プロジェクト」スタート！
- (2) 3つの願い ①開かれた学校 ②地域・家庭の教育力 ③子どもの安全・安心
全ての力が子ども達の笑顔につながる。それが、岩手の復興につながる！

【学年毎のひとづくりの具体像】

- (1) 1年：年少者に思いやりのある接し方ができる子
- (2) 2年：年長者とのかかわりで命の大切さを感じることができる子
- (3) 3年：地域を支える方々の生き方を知り感謝することができる子
- (4) 4年：沿岸地域の方々の悲しみを知り自分の生き方を振返ることができる子
- (5) 5年：中学校生活への夢を語るることができる子 支援し続ける思いをもつことができる子

【2年生の実践】

- (1) 学年経営でめざす子ども像 **ぐんぐん**
- (2) 地域との交流 **スコール高校生との交流**
～生活科 野菜を育てよう～



巨大なジャガイモに大喜び！

2012年（平成24年）5月15日（火曜日）

畑仕事だって世代間交流

向中野小とスコール高と和やか芋植え

盛岡市向中野小の生徒と協力してジャガイモを植えるスコール高の高校生と交流した。14日、近接する高田を離れてきた。スコール高の高校生は、向中野小の2年生30人と一緒に、ジャガイモを植えた。スコール高の高校生は、生活科でジャガイモの栽培について学んでいる。向中野小の2年生は、3年生14人と一緒に、ジャガイモを植えた。

2年生の成果と課題

- ・高校生から命の大切さを学び、見事な作物を収穫することができた。
- ・小学校と高校とで目的意識の共有をすること。児童と高校生がもっと主体的に関わりをもつ内容を提示することが必要である。



スコール高の生徒に教えてもらいながらジャガイモを植える向中野小の児童たち

を教わり作業「ちょっと教わってもらった」と言っています。スコール高の高校生は「芋植えの作業は、向中野小の2年生と一緒に行いました。向中野小の2年生は、ジャガイモの栽培について学んでいる。スコール高の高校生は、生活科でジャガイモの栽培について学んでいる。向中野小の2年生は、3年生14人と一緒に、ジャガイモを植えた。

野さいのせわをしたよ

いもほりに行きたよ

10月29日(月) 晴

スコール高のすけ

スコール高のすけは、向中野小の2年生と一緒に行きました。スコール高のすけは、ジャガイモの栽培について学んでいる。向中野小の2年生は、3年生14人と一緒に、ジャガイモを植えた。

【4年生の実践】



鎌ヶ崎小古玉校長先生の講演会 in 向中野小



向中野小の合唱発表 in 鎌ヶ崎小



宮古市「魚菜市場」の人々との交流

(1) 学年経営でめざす子ども像 **Challenge**

(2) 地域との交流 **体験から学ぶ**

宮古市立鎌ヶ崎小との交流

総合的な学習時間の発展学習

鎌ヶ崎小学校訪問の感想

私はプレゼント係で色画用紙にどんな絵もかくとんふつにすれば鎌ヶ崎の人にもうこんでもえらめを話し合いました。大変なこところは、色づいてやりきてもたためたしやうなすきでもためたからそこともちゅうせいするところでした。

古玉先生からつなみか来たときほとついうふうにはいたのかを教えてください。その時の鎌ヶ崎小学校のみんなの気持ちとあらためて思いました。

古玉校長先生から学んだこと、鎌ヶ崎小学校の人たちと友達になったこと交流したことをめづるすにこれからも海の町の人のこととおうえんしていきまいたです。

向中野小学校 4-1 高橋 葉央

4年生の成果と課題

- ・被災地に行き、鎌ヶ崎小の校長先生や地域の方から話を聞き、復興に向け行動していこうという気持ちをもつことができた。
- ・継続的な交流を続けていくために、相手校との綿密な打合せ、子ども達への方向付け・価値付けが重要であると感じた。

日 報 2012年(平成24年)12月14日(金曜日)



校章づくり 地域一丸

学年をわきま、心にこぼす地域交流の絆を築きました



優秀作の5点表彰

「校章」向中野の頭文字Mを中心に配置し、互いに手を携へ協力し合う「学校と地域・家庭」の姿、小の字は、大自然に恵まれます。未来にはばたく向中野の子ども達を表現している。

公募作品参考に制定



岩手日報 平成24年12月14日

【まとめ】

本校は、平成24年4月に開校した。

学校経営の重点には、新しい学校づくりを掲げ、豊かな心を育てるため、復興教育全体計画を策定した。学年経営でめざす子ども像、ひとづくりの具体像を発達段階に応じて考え、実態に応じて実践することができた。

(成果)左の新聞のように、開校に係る様々な取組を地域との関わりの中で実施できた。沿岸との交流だけが復興教育ではなく、教材開発により地域や近隣幼小中高との連携を効果的に教育活動に価値付けた。

(課題)来年度は1年～6年まで全学年が揃う。本年度の各学年の学びを踏まえた教材開発が必要になる。また、鎌ヶ崎小との4年～6年の学習交流の計画が進んでおり、復興教育の更なる展開が求められる。

<p>キャリア教育</p>	<p>ねらい</p>	<p>復興に取り組む人々の思いや、被災地の現状に触れ、自らも復興を担う力となろうとする意識を育む。</p>
<p>【題材】 震災・津波と復興にかかわる講演会</p>		
<p>【学習対象】 4年生57名 5年生60名 6年生60名 計180名</p>		
<p>【復興教育の視点】 復興に取り組む人々の思いや被災地の現状に触れ、被災した人々の痛みを共感的に理解し、共に支え合いながら生きていこうとする気持ちを持ちながら、自分たちにできること、今しなければならぬことを考えていく児童の育成。</p>		<p>↑ <本校プラスバンド部と野田小吹奏楽部の交流演奏会> フィナーレは野田小の演奏する「ふるさと」の曲で本校児童が合唱をした</p>
<p>【実践の概要】 本校は平成23年度八幡平市のキャリア教育推進校として、キャリア教育を中心とする「人づくり」に力を入れてきた。主な内容としては、「将来の夢」を育む場の設定として全校児童の夢の掲示、卒業生による職業紹介を含めた講演（「先輩こんにちば」）、米作り体験と米の販売や廃油石けん作りと販売（昨年度は売上金を野田小学校へ）、租税教室やマネースクールによる金銭教育などを行った。さらに昨年度は、復興支援として、児童会活動を中心とした支援メッセージを贈る運動、ボランティア委員会を中心とした募金活動、被災地の写真展示、全校集会での講話、復興記念行事への参加などを行った。 今年度は、キャリア教育を柱に復興教育の視点を取り入れ、震災津波に関連した内容を加味しながら、復興・キャリア教育を進めている。</p>		
<p>【実践の詳細】</p>		
<p>◎体験的な学習と外部講師による講話</p> <ul style="list-style-type: none"> ・廃油石けん作り（4年・総合学習）、PTAバザーでの販売、収益金の募金。 ・稲作体験（5年・総合学習）、収穫米の校内販売、収益金の募金。 ・マネースクール（5年・総合学習）<金融機関講師> ・租税教室（6年・総合学習）<税務署講師> ・外部講師による講話 職業への関心を図る講話2回（2年・学活、3年～6年・総合学習） 被災地の現状を知る講話2回（4～6年・総合学習） 		 <p>平成23年度キャンドルは496個作成され平成24年3月11日に盛岡城址公園に灯された</p>
<p>◎ボランティア活動</p> <ul style="list-style-type: none"> ・奉仕体験活動（ゴミ拾い） ・福祉体験活動（募金、書き損じはがき回収） ・挨拶運動・復興記念行事参加（メモリアルキャンドル作り） 		
<p>◎プラスバンドクラブ同士の交流</p> <ul style="list-style-type: none"> ・本校プラスバンドクラブと野田小学校吹奏楽部との交流 		
		
<p>↑ <廃油石けん作りと販売> 4年生は、廃油石けん作りの他に、白杖体験、高齢者体験、手話体験など総合学習で福祉に関する学習を行っている。今回の廃油石けんの売り上げ金については、児童の話し合いにより、被災地と市内の福祉の義援金とに分けておくることになった。</p>		
<p>↑ <東日本大震災募金活動> ボランティア委員会を中心となって、被災地の写真展示と赤十字募金を行った。震災募金として、市内の被災地におくった。</p>		 <p>←カード交換等を通してお互いに励ましあった。</p>
<p>↑ <野田小吹奏楽部との交流> 「焼走り熔岩流まつり」のイベントステージで両校が演奏を行い、バーベキューパーティーや焼走り散策を通し交流を深めた。</p>		

【授業の展開】 被災地の現状を知る講話2回について（講演会）

・ねらい： 東日本大震災の救援・復興にかかわっている方から話を聞き、復興に取り組む人々の思いや、被災地の現状に触れ、小学生の自分たちにできること、今しなければならぬことは何かを考える。

日時	第1回7月12日（木）3校時	第2回11月8日（木）3校時
演題と内容	東日本大震災の救援活動を通して ～ボランティアの心について～ 東日本大震災の被災地で行った救援活動の紹介、活動への思い、ボランティアの心、人の生き方について	3.11をわすれないで ～明日のために今できる事～ 東日本大震災の体験、被災地で行っている復興活動（LIGHT UP NIPPON）の紹介と活動への思い、命の大切さについて
講演者	八幡平市社会福祉協議会 川又 登志子さん	NPO 法人ユリカブ ミッション代表 天津 由理香 さん



【児童の感想】

「東日本大震災の救援活動を通して」

・おかげで福祉や救援活動のことがよく分かりました。東日本大震災にあった人の手紙やハガキの言葉がいい言葉だと思いました。まず、ボランティアではじめにやれることは挨拶ということを知って、私は地域のお年寄りに挨拶をちゃんとしようと思いました。（4年）

・川又さんの話で一番印象に残った事は、「挨拶は人を明るくする」ということです。「明るく大きな声で挨拶することで、人の気持ちを変えることができる」その言葉が心に残りました。次に思いやる気持ちが大切ということがよく分かりました。川又さんが救援活動をした被災した方からの手紙を聞いて、川又さんがその方を思いやったから、あんなに感謝されたんだなと思いました。私も思いやりの心を常に持っていたいと思いました。（5年）

・ぼくは、川又さんの話を聞いてすごいなと思ったことがあります。一つは、被災した人の支援に一生懸命取り組んでいたことです。そして、自分が支援しているのに逆に、自分の方が元気が出るということが一番心に残りました。ぼくは、これから募金などに取り組んで、被災した人の力になれればいいなと思いました。（6年）

【考察】本校は内陸にあり、震災の被害の少ない地域である。そのため震災の被害についてよく理解していない児童が多い。今回、震災津波を実際に体験した人や救援にかかわった人から話を聞くことで多少なりとも、被災地の人の気持ちを共有することができ、命の大切さ、人としての在り方、自らの生き方を考える機会になったと感じている。

「3.11をわすれないで」

・3.11の大震災のときの話を聞いて、命の大切さを学びました。実際に天津さんは「津波」にあっけて、自分の目の前で人が波にのまれていくのを見たり、家ごと流されていくのを見て、自分の故郷がめちゃくちゃになるのは、本当に嫌だと思いました。そういう出来事は誰だって落ち込んだり悲しくなったりするの、天津さんは「今、自分にできることは何だろう。今、自分にできることは全部やろう。」と前向きに考え、いろいろな場所での花火大会「ライトアップニッポン」を計画し、実際に行動をしていて、とてもすごいと思いました。震災で多くの方が犠牲になったり行方不明になったりして、生きたくても生きていけなかった人たちの分までこれから生きていきたいと思いました。大人になったら、復興支援活動などの活動を私も行っていきたいと思いました。（5年）

・私の母の実家が釜石の鶴住居町にあり、祖母が住んでいます。すんでのところでも祖母の家は津波に流されはしませんでした。200メートル先の所までは波が来ていたそうです。ですから、私は3.11の状況を聞くことができ、勉強になりました。「ライトアップニッポン」はニュースで見たことがありました。それをやろうと思った方が教えるに来て下さったので嬉しかったです。～中略～被災地はまだ復興できていません。また、何年先になれば復興できるかも分かりません。ですが、内陸や東北以外の人たちはもう復興していると思っているかもしれません。だから、これからは、沿岸の状況を伝えたり知らせたりしながら復興していかなければいけないと思います。私たちのような小学生にもできることがあれば協力していきたいです。今日は命の大切さ、明日や未来のことを思って生きていくことの大切さを教えていただきました。本当にありがとうございました。（6年）

1. 復興教育のテーマ：つながり大切に～支援から共生へ～

2. 「復興教育」の視点（テーマ設定の理由）

○被災地や被災校を支援したり交流したりするだけでなく、10年後20年後の子どもたちがこうあってほしいという願いや必要性を考え、「つながり大切に～支援から共生へ～」というテーマを設定した。本校で特に大切にしたいつながりとは、「人と人のつながり」である。地域や先輩の思い・素晴らしさ、本校のよさなどを再確認し、自分たちもそのよさを受け継ぎ、伝えていこうとする気持ちをもってほしいという願いを込めている。

○東日本大震災への理解を深めるとともに、陸前高田市立気仙小学校との交流を深めることによって、自分がこれから出来る活動は何か考える。また、気仙小学校の児童・保護者・先生方を収穫祭「橋っ子もちっこそばっこ祭り」に招待して、一緒にそば打ちやもちつきをして交流を図り、楽しい時間を共有する。

○地域を大切に活動（地区民運動会・学習発表会・橋っ子もちっこそばっこ祭り・伝承芸能 等）を継続し、諸行事・諸活動において自分ができる役割を果たすとともに地域の人達へ感謝の気持ちをもとうとする。

写真1：気仙小・橋場小児童職員集合写真



3. 取り組み内容

- ①復興教育デザインの作成【資料1】
- ②つながりを意識した復興教育の内容の洗い出し（教科等への位置付け）
- ③洗い出しを基にした、各学年の「復興教育の流れ」作成と実践【資料2】
- ④被災地見学と被災校（陸前高田市立気仙小）との交流
- ⑤被災地（陸前高田市立気仙小）を招待しての収穫感謝祭の実施
- ⑥「復興教育」のテーマを意識した学習発表会の実施
- ⑦「復興教育」で学んだことのまとめ（IBC「僕の作文・私の作文」で発信）
- ⑧防災教育（駒ヶ岳噴火を想定しての避難訓練）



写真2：気仙小訪問時の交流の様子

4. 復興教育の視点で取り組んだ各学年の実践

1年	いっしょがいいね（生活）プレゼントをどうぞ（図工）はしの上のおおかみ（道徳）
2年	うれしいことば（国語）大すきなたからもの（図工）公園のおにごっこ（道徳）
4年	わたしたちの県とまちづくり（社会）調べて発表しよう（国語）生き物の一年を振り返って（理科）
5年	百年後のふるさとを守る（国語）人のたんじょう（理科）自然災害を防ぐ（社会）
6年	平和について考える（国語）大地のつくりと変化（理科）わたしたちの願いを実現する政治（社会）

五年国語教科書教材「百年後のふるさとを守る」
教材文が防災の必要性を説く内容であるので内容を理解を復興教育に位置付けた。また、学習のゴールを、「学んだことを文章にまとめ、新聞に投稿して発信しよう」として、学習を進めた。

（中略）
陸前高田の松林も、はじめは同じような考えで植えられたのではないだろうか。
気仙小に行ったら、みんなと仲良く交流し、松の木も見てきたいです。堤防を作ったり、松の木を植えたりしながらみんなを守ろうとした人々の気持ちや願いを少しでも分かりたいと思います。
児童の感想（岩手日報「声」欄掲載作文）

学習した内容と、次の気仙小訪問とをつなげている。

5. 被災地見学と被災校（陸前高田市立気仙小学校）との交流

写真3：レクで交流する両校児童



7月12日に、陸前高田市立気仙小学校へ、「気仙小学校児童との交流」「被災地見学」の2点をねらいとして校外学習へ出かけた。児童は気仙小の友だちと会えるのを楽しみにし、高学年を中心にプレゼントを考え、作成した。プレゼントは、11月の収穫祭への招待につなげるため「絵手紙」「ソバの種」の2つにした。当日は気仙小児童や職員の温かい出迎えを受け、気仙小児童会が企画してくれたレクで楽しく交流することができた。また、見学学習では、今だに津波の爪痕の残る海岸沿いを見て、児童も様々なことを感じたようであった。

写真4：心をこめて仕上げた絵手紙



あの恐ろしい大震災から1年4カ月がたち、今の現状をこの目で確かめたいと思って参加させていただきました。自然の力の恐ろしさ、今回は特に津波の破壊力の凄さ、とてもじゃないけれど言葉がでません。簡単に被災された方々に「頑張ってください！」なんて言えません。普通に生活していたのが一瞬にして何もかもがなくなったのですね。大変な事態に遭遇しても、子ども達の笑顔、明るさを失わずに勉強に運動に励んでおられる姿を見て、私は元気をいただけてきました。本当に楽しかったです。

私は祖母ですが、我が家の孫達とも一日一日を大切に仲良く過ごしていきたいと思っています。孫たちにも、物の大切さ、人と人との絆、時間の大切さなど分かってもらえれば幸いです。

(児童祖母の感想)



写真5：もちまきを楽しむ児童

6. 被災校を招待しての収穫感謝祭

11月17日、PTAと地域が一体となって収穫を祝い、そばともちをいただく収穫祭を行った。今回も気仙小学校の児童・職員・保護者の皆さんをお招きした。「気仙小の皆さんに美味しいおそばやおもちを食べさせたい」「楽しんでほしい」という思いから全体の流れを考え、低学年はもちつき、高学年はそば打ちを両校合同で行うことにした。また、全体会では児童会が企画したレクを行ったり、それぞれの伝承芸能の披露（気仙小「けんか七夕太鼓」、橋場小「こまくささんさ」）を行ったりした。限られた時間ではあったが、自分たちのついたおもち、打ったそばを食べ、ひと時を楽しく過ごしていただけたのではないかと思います。

7. 「復興教育のテーマ」～つながりを大切に～を意識した学習発表会



写真6：よびかけによるテーマ発表



写真7：全校劇的一幕

学習発表会のテーマを、「つながる 広がる わたしたちの大切な絆」として、演目もこのテーマに沿ったものにした。東日本大震災から今まで、自分達がやってきたこと、考えたことをスライドとともに発表したり、地元を舞台に絆の深まりを題材にした劇を全校で演じたりすることができた。学習したことを学習発表会において地域に発信し、復興教育に関して地域全体で共有する事ができた。その事が11月の収穫祭成功へつながったと感じている。

8. まとめ

○本校独自の復興教育デザインを作成したことにより、様々な学習や活動を、復興教育の視点からつながりをもたせて取り組むことができた。

○児童は、気仙小学校との交流を始めとして、「人と人とのつながり」について考える機会が数多くあり、その大切さに十分気付いたようであった。今後さらに、地域・社会において自分ができることは何か、将来への心構えを考える学習につなげていきたい。

総合 5・6年	ねらい	絆⑨共感・支え合い 被災地の人々について共感的な理解を図り、思いやりの気持ちをもって、共に支え合いながら生きていこうとする態度を育てる
------------	-----	--

【単元名】 大震災から1年、そして明日へ

【ねらい】

＜追究する力＞

- ・新聞記事を読むこと、ゲストティーチャーの話を聞くこと、見学を通して大震災の様子や復興に向けた取組について理解することができる。

＜表現する力＞

- ・震災の様子や復興を目指した取り組みについて学んだことを、はがき新聞にまとめることができる。

＜生活に生かす力＞

- ・復興について学ぶことを通して、自分も復興に寄与していこうとする態度を育てる。

【復興教育の視点】

- ・被災地の震災による影響は大きく、復興へはまだ遠い状況であることをとらえる。
- ・復興に向けた取組について調べることを通して、復興への関心を高める。
- ・大震災や復興に向けた取り組みから学んだことをふり返り、復興への決意についてまとめる。

【資料】岩手日報記事「日はまた昇る」「明日への一歩」、奇跡の一本松についての新聞記事等

【実践の概要】

【第1次】（6時間）

- 新聞記事や新聞記者の話から大震災から1年後の陸前高田市の様子について理解する。
 - ・新聞記事「日はまた昇る」を読み、家族を亡くした被災者の思いについて感想をまとめる。（2）
 - ・新聞記者の話と新聞記事をもとに大震災の様子や1年の復興について思ったことをはがき新聞第1号にまとめる。（4）



【第2次】（9時間）

- 新聞記事や見学を通して復興に向けた取り組みについて調べる。
 - ・奇跡の一本松の復興を新聞記事や東北育種場長の話や見学をもとにはがき新聞第2号にまとめる。（5）
 - ・「明日への一歩」の記事を読み復興に向けて取り組んでいる人達の頑張りを理解し、最も印象に残った記事について、はがき新聞第3号にまとめる。（4）



【第3次】（2時間）

- 大震災や復興に向けての取り組みから学んだことをふり返り、これからの自分の復興への決意についてはがき新聞第4号にまとめる。（2）



防災教育 全学年	ね ら い	避難訓練及び応急処置の仕方の訓練を通して、災害発生時における安全な避難の仕方を身につけるとともに、自らの命を守ろうとする意識を高める。
-------------	-------------	---

【題 材】 従前の避難訓練や応急手当訓練を、より具体的、現実的な行動に近づけるために見直しして実行し、非常時に落ち着いて行動できる態度を育てる。

【復興教育の視点】

- 防災リテラシー育成の視点からこれまでの防災教育を見直し、自分で情報を把握し判断すると言った思考力、判断力及び実践意欲の育成を図る。

【実践の概要】

1. 授業中の避難訓練

① 事前指導

- ・ DVD 資料「災害から命を守るために①」（文部科学省・防災教育教材：平成20年）を使い地震が発生した際の留意点を学習する。

② 避難訓練を実施する。

- ・ 地震発生を想定し、発生直後の身の処し方、避難の経路、避難時の留意点、教師の対処の仕方を学習及び確認する。
- ・ 避難後に、本日の訓練の評価と、命を守るためにふだん心がけておく点を校長と講師（消防署員）とで解説する。



2. 応急手当の学習会

- PTAの夏の活動に救急救命法講座がある。今年は、この講座に災害時の応急手当の内容を加えて、学習会を親子で行った。非常時に人命を確保するためにAEDも用いた救命法と、身近にある物を使っての止血法や骨折への手当等を実践的に学習ができた。



3. 授業時間外の火災時における避難訓練

① 事前指導

- ・DVD資料「災害から命を守るために②」（文部科学省・防災教育教材：平成20年）を使い、自由時間に火災が発生した際の留意点を学習する。

② 自由時間時の避難訓練を実施する。

・ねらい

- ア. 授業時間以外でも自分で放送を聞いて判断し、出火場所に応じて安全に避難することができる。
- イ. 放送や近くにいる教師の指示に従って行動できる。

4. 今後の指導について

東日本大震災津波が起きる前の避難訓練においても、火災想定の場合には煙体験を行うなど、実際場面に近づける努力はしてきた。しかし3・11時の実際場面では大人でさえ足がすくんだなど、思いもよらないことが起こった。そこで、今後の訓練はより現実的な想定や状況のもとに実施しなくてはならないことを痛感した。記憶が新しいうちに実際場面に近い状況で訓練をしたい。また、児童個々の判断力の差で被害状況が大きく違ってくるので、集団での訓練を繰り返しながら個々の力量を高めていきたい。

防災教育 3～6年	ね ら い	自宅や通学路など校外で被災した場合の注意点を日ごろから意識し、非常時に柔軟に対処できる能力を養う。
--------------	-------------	---



【題 材】 自宅にいるときに大地震が起こった場合の注意点を意識するために、家の間取りを書き、改善点を紹介し合う。

【復興教育の視点】

○防災リテラシー育成の視点からこれまでの防災教育を見直し、自分で情報を把握し、判断すると言った思考力、判断力及び実践意欲の育成を図る。

【実践の概要】

○9月に行った地震想定避難訓練と関連させた授業の展開例

	主 な 学 習 活 動	留 意 点
導 入	<p>1. 課題の把握</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> <p>家にいるとき、大地震がきたら・・・!?</p> </div> 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 3/11の大地震や阪神大震災の時に、家の家具や割れガラスで亡くなった人のいたことを想起させる。 ○ 学校にいるときの避難訓練では、頭を守ることや、避難経路に危ないものはないかを確認しているので、在宅時に大地震が来たらどうするか、どうなるかを考える学習であることを理解させる。 
展 開	<p>2. 自宅の見取り図を書き、危険が予想されることを書き込む。</p> <p>①方眼紙に家の見取り図を書く。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ○ 家の見取り図は、学年に応じて概略図で良いことの確認。(例：3年生は、一部屋だけで可など)

②見取り図に、次のことを書き込む。

- ・ダンスなど、倒れたら危ないもの。
- ・落ちてきたらケガをするようなもの。
- ・逃げるときに、通路をふさいで邪魔になりそうなもの。
- ・そのほか、地震で危なそうなもの。
- ・外に出て、家のすぐ近くにある危なそうなもの。

③どうしたら良くなるのか、考えられることを書く。



終
末

3. 発表し、交流し合う。

- 家の中や近所でも注意しなければならないことがあるので、ふだんから気に留めておくことが重要であることに気付かせる。

【児童の感想から】

- ・こうやって図に書いてみると、いざというときの脱出路が危険でいっぱい、逃げ道が少ないことに気がついた。家族と話し合っ、もう少し片づけをしてしっかり地震対策をしようと思う。
- ・廊下にけっこう物があるので、逃げるときに邪魔になると思うので、気をつけたいと思う。家族にも廊下に物を置かないように呼びかけたいと思う。
- ・自分の家の図を書いていると、どんどん危険なところが出てきて、たくさんあるのに気づいた。
- ・危ないところが分かったので、逃げるときに危ない場所を通らないようにしたい。
- ・いつも何気なく暮らしている家にも、たくさん危険なところがあるんだなあ〜、と思った。これからは、『いつ起こってもおかしくない』という気持ちで毎日過ごしたい。

【今後の指導について】

これまで児童は、災害についてはビデオや書籍で学習したり、避難訓練を行ったりして身を守る術を学んできた。児童が学校で過ごすのは1日の約3割。校外でも、自ら頭を働かせて危険性を把握し、災害時の行動に行かせるよう、防災教育を工夫していきたい。

総合 6 学年	ね ら い	<p>(1) 生き方を考える (考える) 地域の先人の生き方・考え方を学び、自分がどう生活していきたいか考えさせる。</p> <p>(2) 役割をはたす (果たす) ボランティア活動を通して、今後さらに、自分には何ができるか考えるきっかけとする。</p>
------------	-------------	---

【題材】

地域の先人から学ぼう～岩手の平和を願って～

【関連】

国語 自分の考えを明確に伝えよう「平和」について考える

【復興教育の視点】

被災地でのボランティア活動を行うことを通して、被災者の心の痛みや被災地の現状を理解しようとする心を持ち、今後自分には何ができるか、どのように生きていくのか考えるきっかけとする。

【実践の概要】

本校の復興教育の「視点①生き方を考える (考える)」「視点②役割をはたす (果たす)」の2つの視点を重点とした。まず、被災地学習に参加してきた児童の参加報告や被災地で体験された方の講話をきっかけとして、今、自分達にできることはないか話し合い、被災地のボランティア活動を行った。(視点②) この体験を基に今後自分には何ができるのか、どう生きていくのか意見文としてまとめた。(視点①)

【実践の詳細】

夏休みに被災地学習に参加してきた児童 (2 名) の活動報告や被災地で体験した方の講話をきっかけに、現在の被災地や被災者の状況を考えさせ、今、自分達にできることはないのか考えさせるところからスタートした。どの児童も考えつくのは、ボランティア活動であり、早速被災地でのボランティア活動を行うことになった。そこで、総合の学習としてもともと設定してある題材「地域の先人 (新渡戸稲造・宮沢賢治) から学ぼう」に、国語「自分の考えを明確に伝えよう『平和』について考える」を盛り込み、復興教育の視点から設定し直して計画を進めていくことにした。そして、活動のゴールには「意見文にして発信する」ことを設定した。

【活動の計画と一連の流れ】

第1次 単元のねらいを知り、学習の見通しや課題をもつ。

- 被災地学習に参加した児童の発表や、被災地で体験した方の講話を聞き、自分達にできることはないか話し合う。

- 2 人のために尽くした地域の先人にはどんな人物がいるのか知る。
- 3 新渡戸稲造と宮沢賢治について大まかな業績を調べる。
- 4 単元の最後に、先人から学んだこととボランティア活動したことを基にして意見文にまとめることを確認する。

—児童の感想— 避難場所で唐丹中学校の生徒が、みんなのために薪を集めたり沢に水汲みに行ったり食事作りを進んでしたりしたことにびっくりした。ぼくも同じようなことができるのかと思った。何か人のためになることをしたいと感じた。

第2次 先人について調べたり、ボランティア活動をしたりすることにより、自分の考えをもつ。

- 1 先人（生き方・考え方・業績など）をフィールドワークで調べる。
- 2 被災地でボランティア活動を行い、被災地での体験からどんなことを考えたか話し合う。



<ボランティア活動>



<旧高田市役所見学>

—児童の感想—復興なんてまだまだだと思った。68人で一生懸命働いてもすっかりきれいになったわけではなかった。ここで暮らす人達の気持ちが伝わってきた。

第3次 学んだことを基に意見文としてまとめ、発信する。

- 1 先人について、個人新聞にまとめる。
- 2 地域の先人の考えから学んだことを取り入れて、意見文としてまとめる。
- 3 学級での交流、学習発表会での学年発表などを通して発信する。







<学習発表会での
意見文の発表>

—児童の感想—「世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」という宮沢賢治の言葉にあるように、自分のことだけでなく岩手県全体が平和になるように考えていきたい。誰もが苦しむことなく生活していくために、自分に何ができるか考え、実行することが大切だと思う。これからも募金活動やボランティア活動などの被災地を元気にする活動を積極的に行い、人の役に立つことをしていきたい。

【まとめ】

被災地の方の話の聞いたりボランティアを体験したりする活動を組み込んだことにより、現在の被災地の状況を感じ取り、今後自分達に何ができるのか、どのようにしていったらよいのか考えるきっかけとなった。単元の最後に意見文としてまとめ、発信することにより、被災地に思いを寄せて今後の復興を考えていくことの大切さを広めることができた。

音楽・総合 4学年	ねらい	(3) 自他を大切にする【かかわる】 被災地の現状や復旧・復興へ、力強く歩み出そうとしている人の思いに気付くことで、自分にできることを進んでやり、人のために役立とうとする意欲を育てる。
<p>【題材】 やさしい宮野目 ～宮野目小学校から、やさしさを発信しよう～</p> <p>【関連】 学習発表会・市内音楽発表会に向けての合唱指導</p> <p>【復興教育の視点】 ・震災当時の被災地の様子を知り、今置かれている環境に感謝しつつ、主体的に岩手の復興に関わろうとする意欲をもつ。</p> <p>【実践の概要】 ・復興支援のねらいを核に、本校4学年の総合的な学習の後期テーマ「やさしい宮野目」に取り組み、単発ではない継続的な復興支援教育を実施する。 ・音楽を通し、被災地にメッセージを伝えようとするので、より深く震災に関心をもち、進んで復興に関わろうとする意欲を育てる。</p> <p>【実践の詳細】 ※復興支援教育を含まないその他の学習</p>		
日時	総合的な学習〈やさしい宮野目〉	音楽〈音楽発表会に向けて〉
8/24	後期テーマ〈やさしい宮野目〉 オリエンテーション 「宮野目小学校から、 やさしさを発信しよう」	※合唱練習 「♪イーハトーブの風」
8/28	※孫による認知症講座	
9/5	<p>講話【実践①】 「大震災の被災地における 子どもたちの様子と 私たちが今できること」 講師 矢沢中学校 藤館 茂校長先生</p>  	<p>《講話後の児童の感想》 藤館校長先生のお話をうかがい、私は食料や鉛筆・ノートのひとつひとつが、とても大切なものだと感じた。だから、それらを大切に使用しなければならないと思った。だから食べ物は残さず食べ、鉛筆や消しゴム・ノートなども最後まで使おう。 今自分が勉強していただけること、当たり前のように生活していただけることも、たくさんのおかげだと思ふ。そのことを忘れないでいたい。みんなのために一生懸命働いたり、思いやりをもって接することも大切だと思った。先生のお話を聞いた今の私は、家族や友達みんなのために働いたり手伝ったり、思いやりをもって接したりすることが、素直にできると思ふ。それから、「5つの誓い」も忘れずに生活していきたいと思ふ。</p>

日時	総合的な学習〈やさしい宮野目〉	音楽〈音楽発表会に向けて〉
9/6 以降の 授業	<p>[課題] 「被災地の方々のために私たちができることを考えよう」</p> <p>[視点] 大変なことを一緒に背負い生きていくということ。</p> <p>[視点] 「力になるよ」というメッセージを伝えること。</p> <p style="text-align: center;">↓</p> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;"> <p>「やさしい宮野目小から被災地にメッセージを贈ろう」</p> </div>	<p>[課題] 合唱曲を決めよう【実践②】</p> <p>[視点] 「世界全体が幸福にならないうちは個人の幸福はありえない」という宮沢賢治の精神を合唱に表す。</p> <p>[視点] 震災応援ソングを聞いたり世界各国からのメッセージを見たりして、話し合う。</p> <p>※合唱練習</p> <ul style="list-style-type: none"> ♪ Dona nobis pacem ♪ 願い ♪ People Of The World <p>《発表の場》</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学習発表会 ・音楽発表会 ・宮野目地区文化祭
10/13	<p>「被災地の方々に届くよう心をこめて歌おう」【実践③】</p> <p>○学習発表会（10月13日）</p>	<p>○市内音楽発表会（10月25日）</p>
10/25		
10/27	<p>宮野目地区文化祭（10月27日）</p>	

【考察】

【実践①】 矢沢中学校の藤館校長先生の講演で、児童は同じ小学生が受けた震災の実態と当時の大変さ、また、そこでどのように同年代の子どもたちが、地域の方々の役に立ち、支えになったかを学ぶことができた。そして、子どもたちの元気に活動する姿や明るい歌声が、傷つき痛みを抱える大人の最大の癒しであることも学んだ。合唱で震災応援ソングに取り組むための意欲付けとなった。内陸で生活する児童にとって、とても貴重な経験であると思う。震災を風化させないためにも、今後も様々な形で震災の事実に触れさせていきたいと考える。

【実践②】 合唱の候補曲はあらかじめ教師が決めておいたが、インターネットにアップされている世界各国からの震災後のメッセージや、多くの応援ソングを視聴することで、「自分たちも思いを伝えたい」という意欲が高まった。また、支援や思いの伝え方は、直接行ってボランティアをしたり励ましたりするだけでなく、いろいろな方法があることも知った。子どもだから出来ることは限られているが、今自分が出来ることに主体的に取り組もうとする意欲を、これからも大切にしていきたい。

【実践③】 被災地から転校した児童が、当初の取り組み（藤館校長先生の講話）には本人の希望により参加できなかったが、取り組みを続けていくうちに積極的に合唱の練習に取り組むようになった。呼びかけでは進んで「大地と海がきばをむいた日」という台詞を選び、大きい声で発表することが出来た。応援ソングを選び合唱することは、震災の被害をあまり受けていない児童が、その被害について考えるよい機会になるだけでなく、実際に被災した児童の、傷ついた心を開放することにおいても有効であった。

道徳
第5学年

ね
ら
い

社会生活を支え奉仕し貢献するために、自分の力を発揮し、積極的に社会に役立つ喜びを感じるよう公共心を育てる。
4 - (4)



【資料名】 「小さな手から」

【対象】 第5学年 男5名 女4名 計9名

【復興教育の視点】

様々な災害に直面しても、お互いに協力し合い、支え合いながら困難に立ち向かっていくことの大切さを学ぶことにより、郷土の復興・発展を支える人材育成を図る。

【指導構想図】

	体験的活動	道徳の時間	各教科の学習	日常指導・その他
8月 9月	○総合的な学習の時間 「つなげよう心と心」 1次 被災地・高寿園訪問 震災の様子や被災地の現状を知り、被災地の方々のために、自分達ができることを行う気持ちを持たせる。		○理科 「花から実へ」 キュウリやサツマイモなどの栽培を通して、勤労生産することの大切さを学ばせる。	○小友町敬老会 ○小友祭り・遠野祭りへの参加 地域の行事に積極的に参加するとともに、学級で話題にし、お互いに認め合わせる。
10月		◇「ギブ・キッズ・ザ・ワールド」 (勤労・社会奉仕・公共心) 4(4) 汗を流して働くことの喜びを改めて見つめ直し、公共のために役に立ちたいとする。		
11月	○震災復興募金活動 被災地を支援するために、自分達でできる募金活動に、進んで取り組ませる。		○社会 「工業を支える人々」 人にやさしい車づくりや働く人にやさしい職場づくりの大切さについて考えさせる。	○清掃活動 ○給食当番活動 ○係活動 ○各行事での準備・後片付け
12月	○総合的な学習の時間 「つなげよう心と心」 2次 キャップハンディ体験をし、障がいを持つ人の身になって考えさせる。またふれあいホームでボランティア活動に、進んで取り組ませる。	◇「小さな手から」 (勤労・社会奉仕・公共心) 4-(4) 社会生活を支えるために、自分が役立っていこうとする気持ちを持たせる。		○一人暮らしのお年寄り方への年賀状 地域のお年寄りのためにできることに、進んで取り組ませる。

【実践の概要】

この資料は、今から17年前、大地震のため神戸の町全体で火災が発生し、多くの尊い人命が失われた阪神淡路大震災が舞台である。体育館での不自由な避難生活を送っていた中で、子ども達が避難者に役立つ新聞作りに取り組み、多くの避難者に元気を与えたという内容である。

震災のショックと生活の不自由さと不安の中で、避難者のために必死に働いている先生方の姿を見て、自分にできることはないか考えた主人公の気持ちに共感させた。東日本大震災の被災地を訪問し、奉仕活動を行ったことと関連させ、人のために役立つことを実行しようとする気持ちを高めさせたいと考えた。

【実践の詳細】



体育館で目が覚めたときのゆみ子は、どんな気持ちだったでしょう。

働く先生方の姿を見て、ゆみ子はどんなことを考えたでしょう。

おばあさんにほほえみかけられたゆみ子は、どんな気持ちになったのでしょうか。

- 不安だった。「いつまでこんな生活が続くのか。」と考えたと思う。
- この後どうなるか、不安だったと思う。

- 何もしない自分がはずかしかったと思う。
- 私も何かしなきゃと思った。
- 何かをする元気が出てきた。
- 自分にできることをさがそうと思った。

- おばあさんのように笑顔がどんどん出てくればいいな。
- みんなのために何かすることができてよかった。
- 高寿園のおばあさんもほほえんでくれたとき嬉しかったので、ゆみ子も同じだと思ふ。



【児童の感想】

- ゆみ子は避難者のために、クラスで新聞を作り、みんなを励まし、自分まで元気になって、ゆみ子はすごいと思いました。「高寿園」には励ましに行ったのに、逆に励まされた気持ちになったことを思い出しました。
- ぼくもゆみ子みたい東日本大震災のときに、何かできないかなと思って、被災地から来た人におにぎりをたくさん作って、わたくし活動をやったので、人のために役立つ喜びはよくわかると思いました。

【まとめ】 ○成果 ●課題

- 導入や終末で、東日本大震災の被害やボランティアなどの写真を見せることで、大震災時の状況を想起したりボランティアの大切さを感じさせたりすることができた。
- 体験活動と授業を関連づけることで自分達の活動の価値を確認することができた。
- 体験活動と関連付けた道徳の授業では、活動の価値を再認識させ次の意欲につなげていくことが大切なので、生活経験やその時その時の思い等についての把握をしっかりと、授業で活かしていくことが必要である。

生活科
総合的な学習の時間

ね
ら
い

地域や被災地の施設を訪問し、自分達ができることに進んで取り組む社会奉仕の心や公共心を育てる。

【実践名】 特別養護老人ホーム「ふれあいホーム小友」・「高寿園」訪問

【対象】 「ふれあいホーム」訪問 第1学年～第3学年：27名 第5学年：9名
「高寿園」訪問 第4学年～第6学年：30名

【復興教育の視点】

お年寄りを尊重したり思いやりの心をもって接したりしようとする気持ちや公共のためにつくそうとする心を育成するとともに、自分が価値ある存在であることを感じさせ、豊かな社会を築いていこうとする態度を育てる。

【実践の概要】（5年生「高寿園訪問」と「ふれあいホーム訪問」の例）

総合的な学習の時間

単元名「つなげよう心と心」（35時間扱い）

1次

- 被災地の様子を調べよう（5時間）
- 被災地のために出来ることを考えよう（3時間）
- 「高寿園」訪問の計画を立てよう（5時間）
- 「高寿園」訪問（4時間）
[奇跡の一本松と市街地の見学]

道徳

◇「小さな手から」（勤労・社会奉仕・公共心）4・(4)
社会生活を支えるために、自分が役立っていこうとする気持ちを持たせる。

2次

- 福祉をもっと詳しく調べよう（2時間）
- キャップハンディ体験をしよう（2時間）
- ふれあいホーム訪問（2時間）
- つなげよう心と心（4時間）

【実践の詳細】

【高寿園訪問】

Aグループ：ガラスや鏡をきれいにする活動



「高寿園までの道は、津波の被害の跡が残っていました。高寿園のおじいさんおばあさんは、とても悲しい思いをしたのだなと思いました。『元気になるほしい』『きれいな場所で安心して過ごしてほしい』と心をこめてガラスを拭きました。」
『ありがとう』という言葉が、なんだかとてもうれしかったです。心にしみました！」

Bグループ：車椅子や歩行訓練の補助をする活動



「一番うれしかったのは、いつもはなかなか起きてこないというおばあさんが、ぼくが『おはようございます。』と声をかけたら、ずっと起き上がって笑ってくれたことです。」
「私と一緒に手をつないで歩いてくれたおばあさんの笑顔を見て、高寿園でこの活動をしてよかったと思いました。自分たちでも役立つことがあるんだな、できるんだなと思いました。」

昔語りや「よさこいソーラン」の発表

「高寿園では、千人以上の方が避難してきたと聞きました。大変な思いをしてきたおじいさんおばあさんたちのために、ぼくは一生懸命踊りました。」

「高寿園の方々には、津波で家族や家が流されて辛い思いをしたと思います。だけど、少しずつ少しずつみんなで協力していけば、必ず、また町がもとに戻ると思います。だから、あきらめないうちで一緒に頑張りましょうという気持ちを込めて『エール!』を歌いました。」

「私の語りを真剣に聴いてくださってとてもうれしかったです。この機会を通して、高寿園のみなさんを励ますことができたと思います。また来られたらいいなと思います。今日はとてもいい日でした。」



【ふれあいホーム訪問】



『ふれあいホーム』の訪問では、カレンダーの色塗りや合唱・合奏をしました。カレンダーの色塗りでは、交流のために利用者の方と話をしようと思っていたのですが、いざ、隣に座るとなかなか話ができなかったです。」

『高寿園』では、4人くらいでグループを作ってお世話をしました。今日は、1人で2～3名のお年寄りの方々と話をしなければならなかったのが、なかなか話ができませんでした。難しいな～と思いました。」

「キャップハンディ学習で、『何かをする時には必ず声をかけること』を覚えてもらっていましたが、なかなかできませんでした。でも、少しでもおじいさん・おばあさんの役に立てたかなと思います。」

【保護者・祖父母の感想】

- 家では、被災地には連れて行ったことがありませんでした。でも、被災地の現状をしっかりと見てほしいという気持ちがありましたので、今回はとてもいいことに取り組んでもらったなと感謝しています。
- 高寿園から帰ってきた子どもは、「ありがとう」と言ってもらったことが、とてもうれしかったらしく、にこにこしながら報告してくれました。小さなことでも自分たちができることに取り組んでみる…私たち大人も頑張りたいですね。
- 私も、「ふれあいホーム」で働いていますが、孫が同じように高齢者のお世話をしたいと聞いて、すごくうれしく思いました。楽な仕事ではありませんが、頑張って夢を叶えてほしいと思います。

【まとめ】 ○成果 ●課題

- 事前に陸前高田市の被災前の景色や街並みについて写真を使い学習しておいたことで、車窓から見る現状に心を痛めていた児童が多かった。そのことから、より一層「高寿園のみなさんのために自分たちができることを頑張る」という思いを強くしていた。
- 「高寿園」での活動を、道徳で価値を再確認して「ふれあいホーム」の活動につなげた。訪問という与えられた場面があるから福祉について活動するのではなく、日常生活の様々な場でも福祉・ボランティアの視点から物事を考え、実行できるようにしていきたい。

被災地 現地学習会	ね ら い	被災地の現状を把握し、自分たちができることは何かを考え全校や地域に 発信していく。
<p>【題材】 東日本大震災津波被災地現場及び復興教育連携校（釜石市立平田小学校）訪問 （平成24年8月2日）</p> <p>【対象】 第5・6学年の代表児童（執行委員会、掲示委員会、ボランティア委員会、学級委員長）</p> <p>【復興教育の視点】</p> <ul style="list-style-type: none"> ・東日本大震災において、被害の大きかった沿岸地域の現状を把握し、全校に伝えることによって、自分たちができることは何かを考えて実行するためのきっかけづくりをする。 ・被災地の復興に向け、同じ郷土岩手を生きる人間としてこれからの生き方を考えることができるようにする。 <p>【実践の概要】</p> <p>（1）釜石市立平田小学校とのつながり</p> <ul style="list-style-type: none"> ・募金活動（執行委員会、ボランティア委員会） ・メッセージカードの作成（全校児童） ・二子里芋の贈呈 <p>（2）被災地現地学習会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・被害の状況を見て学ぶ（陸前高田市内、奇跡の一本松など） ・現地の方の話を聞く（岩手県立高田松原野外活動センター所長、釜石市立平田小学校教諭など） <p>（3）被災地現地学習会の報告</p> <ul style="list-style-type: none"> ・現地学習会で感じたこと、考えたことなどを全校児童や地域に発信する <p>【実践の詳細】</p> <p>（1）釜石市立平田小学校とのつながり</p> <p>募金活動は、昨年度からボランティア委員会の企画で行っていた。持ち寄った学用品とともに平田小学校へ届けた。昨年度の募金額は11,250円、今年度は11,123円（4～7月まで）となった。</p> <p>また、執行委員会でも、プルタブを集めて換金して義援金として届ける活動も行った。現地学習会をすることが決まってからは、執行委員会が中心となって、義援金の他に届けたいものを全校で話し合った。その結果、全校一人一人のメッセージを届けることに決まり、現地学習会の時に平田小学校へ持参した。</p> <p>本学区である二子町の特産物「二子里芋」は、学校農園で毎年栽培している。その二子里芋も、合わせて秋の収穫後に平田小学校に贈った。</p>		



＜義援金を届ける＞



＜応援メッセージを届ける＞

(2) 被災地現地学習会 1 (陸前高田市) 平成24年8月2日(木)

津波により、甚大な被害を受けた陸前高田市を見学。震災後に整備された広い駐車場(気仙大橋付近)でバスを降りた。そこでは、最初に、当時の岩手県立高田松原野外活動センター所長から、震災時の様子や陸前高田市の復興の動きについて講話をいただいた。児童は、施設利用者を避難誘導した様子や津波が迫ってくる様子などの話を真剣に聞いていた。また、「震災は過去のものになっていない」「町の様子をみると、復興はあまり進んでいないと感じている」などという所長の言葉から、現地で生活をしている方の率直な気持ちの一端にも触れることができた。



＜高田野活所長の話＞



＜山積みのがれき＞



＜海水が入り込んだ旧市街地＞

講話の後、奇跡の一本松や当時の被害そのままの高田松原野外活動センターの建物付近を見学した。所長に解説をしていただき、津波襲来前と後での海辺や建物の変化を知った。



＜高田野活跡 周囲は瓦礫＞



＜一本松とユースホテル跡＞



＜一本松の周辺＞

その後、バスで市内を巡った。市役所跡や避難所とされていながら津波が襲い、多くの犠牲者が出てしまった市民体育館跡などを見学した。広い更地の中に大きな建物が点在する様子をバスの中から写真におさめる児童が多くいた。



<高田旧市街地一帯>



<市役所跡>



<3階まで破壊された建物>

(3) 被災地現地学習会2 (釜石市立平田小学校) 平成24年8月2日(木)

義援金や全校児童のメッセージを届けることの他に、(震災の様子を職員に聞いて)被害や復興について知ることを目的として訪問した。

二子小学校からの義援金、メッセージをお渡しした後、震災時やその後の様子について職員から、スライド写真を交えて説明をいただいた。

<平田小学校の被害の概要>

昇降口まで津波が押し寄せたものの建物破壊の被害はなく、幸いにも犠牲になった児童や、同居する家族の犠牲もなかったという。

説明の中から、自分の家を失ったり、親が仕事を失ったりといった状況はあるものの、平田小学校の児童は、明るく前を向いて毎日の生活を送っていることが見えてきた。



<釜石市立平田小学校>



<震災時やその後について説明を受ける>

(4) 被災地現地見学会の報告(学習発表会) 平成24年10月20日(土)

8月2日(木)の被災地現地学習会について、見て聞いて感じたことを全校児童や地域へ発信するために、報告会を行った。現地学習会後にまとめた児童一人一人の作文を元にして作った発表原稿をみんなで分担して、現地で撮影した写真とともに発表した。



＜学習発表会での発表の様子＞

＜発表原稿＞

わたしたちは前期の執行委員会、掲示委員会、ボランティア委員会、そして、5・6年生の学級委員長です。わたしたちは、二子小学校を代表して、8月2日、陸前高田市、大船渡市、釜石市の3つの沿岸の地域に行ってきました。

昨年の3月11日、東日本大震災が起きました。この二子小学校や地域でも地震の大きなゆれを感じました。さらに、沿岸地域では、津波により多くの犠牲者が出てしまいました。その被害はとても大きいものだったと思います。しかし、昨年の3月11日に沿岸地域では、どんなことが起こっていたのか、被害の実際はどんなものだったのかなどは、テレビや新聞などでの情報でしか知ることはできません。

そこで、被害の様子を実際に見て、聞いて、確かめてくることを目的として、東日本大震災の被害の大きかった沿岸地域に行ってみ学学習をしてきました。また、今年は、「復興元年」と言われています。沿岸地域は、そしてそこにすむ人々は、どんな苦労や努力をして復興にはげんでいるのか、その様子もしっかりと学習してきました。今回の沿岸地域での現地学習会を通して、わたしたちが見てきたこと、聞いてきたこと、そして、感じたこと、考えたことをみなさんに伝えようと思います。

わたしたちが最初に訪れたのは陸前高田市です。低い土地が多い陸前高田市は、津波の被害がとても大きかったところです。写真のように広い土地には、かつては建物がたくさんあり、人々が生活していました。津波によって、所々に大きな建物がぼろぼろの状態に残っているだけです。周りには、たくさんのがれきが山積みになっていました。がれきには、大きな木のほか、冷蔵庫や洗濯機など、毎日の生活に使うものや、ボール、そして、小さな子どもが遊ぶようなおもちゃがありました。今は、人が住むことが想像できないところですが、あの津波がおそった日までは、確実に人々が生活していたということが分かります。

津波にたえぬいたとして世界中に知られることになった「奇跡の一本松」です。7万本あったと言われている高田松原の松、その中で、たった1本だけが残っていました。しかしその一本松も、実は枯れているとのこと。とてもさびしい気がします。復興の力になるために今は切り取られ、手入れをされてからまた復活するそうです。

その一本松があったそばに、岩手県立高田松原野外活動センターがありました。ここも、津波によって破壊されてしまい、現在はそのまま残っています。当時、高田松原野外活動センターの所長さんだった菅原均さんに当時の様子や現在までの復興の様子を聞く機会がありました。

菅原均さんの話によると、陸前高田市は、東日本大震災の犠牲で2千人ほどの市民が命をうしなったり行方不明になったりしたということです。さらに、当時2万3千人ほどだった人口が、犠牲や引っ越しを余儀なくされたことにより、現在では、1万7千人ほどまでに減っているそうです。復興のためには、人間一人一人の力と協力が必要なのに、その人の数が減ってしまっているのは、とても残念でさびしい気がしました。しかし、家族を失い、すむところも、仕事も失った人々のことを思うと、無理矢理陸前高田市に引き留めておくこともできません。実際、菅原均さんも陸前高田市の復興はあまり進んでいないと感じているそうです。

そんな陸前高田市でしたが、津波の被害が少なかった高台に仮設の店が並んだり、道路に花を植えているボランティアの人々の姿があったりと、少しずつではあるが、復興に向けた人々の努力を見ることができました。菅原均さんに、「わたしたちができることは何かありませんか」という質問をしたところ、菅原均さんは、「被災地の様子を実際に見て、その様子についていろいろなことを感じ取ってほしい」とおっしゃっていました。「被災地の様子を実際に見て、いろいろ感じてほしい」。この言葉がとても印象に残りました。

陸前高田市の見学の後には、大船渡市をバスで通過して、釜石市に向かいました。バスから見た大船渡市も、津波のつめあとがいまだに残る場所が多くありました。

釜石市では、市内の平田小学校というところに行きました。そこへは、わたしたちが昨年度から行っている、プルタブ募金や、ボランティア委員会の募金、そして、全校のみんなで書いた応援メッセージを届けるという目的がありました。全校のみんなの気持ちをしっかりと届けることができました。

平田小学校でも、震災当時の様子やその後の様子について、話を聞くことができました。話してくださったのは、6年生の担任をしているという佐藤和行先生です。この佐藤先生が住んでいた家は、津波によって全て流されてしまったそうです。そんな体験をして佐藤先生ですが、明るく元気にわたしたちに対応してくださいました。

平田小学校へは、津波が学校の玄関の前まで来たそうです。幸いにも、犠牲になった児童はいなかったそうです。それでも平田地区では、家が流されたり、親戚の人が亡くなったりしたというのはあったそうです。震災直後、地域の多くの人々が、避難所となった学校に集まったそうです。3月11日、震災当日こそ、食べ物に困ったということです。

やがて、続々と全国から、食料、生活用品などが届いたそうです。佐藤先生は、とてもありがたいことだと思ったそうです。様々なものが届けられるのはどんどん続き、勉強のために必要なノートや鉛筆など、ありとあらゆるものが届いたのを見て、日本はずいぶん豊かな国だなあと改めて感じたということもおっしゃっていました。家をなくす、仕事をなくすなど、被害の様子は様々ですが、その日その日を生活するのには、大きな苦勞がないほど、ものはあふれていたそうです。

このお話を聞いて、わたしたちの被災地に対する見方、考え方も変化しました。今までは、津波の被害が大変だ。かわいそう。なんとかしてあげなければ……。そういう思いがありました。それでも今は、何とか生活をしている。学校にも行き、食べるものにも困らないでいるという状況が見えてきました。佐藤先生の話でも、平田小学校の子どもたちは、確かに被災した地域で暮らしているけれども、決して下を向いているわけではなく、わたしたち二子小学校のように、元気に明るく毎日を過ごしているということです。

確かに、沿岸地域は、津波の被害によって、元通りの生活には戻ってはいません。家を失い、

家族を失い、悲しみの中にいる人もまだたくさんいる状況ではあります。それでも、みんな、前を向いて明るくがんばっているということを感じました。

陸前高田での菅原均さんに質問したのと同じように、「わたしたちにできることは何かありませんか」という質問をしてみました。佐藤先生は、「二子小学校のみんなも、毎日の勉強やスポーツをがんばって、そして、平田小学校のみんなと競い合ってほしい」といっていました。これは、同じ小学生として、同じ岩手県の人として、お互いがんばって生きていこうということだと感じました。北上市と釜石市、場所は離れてはいるけれども、心はつながっていて、そこで一緒にがんばっていくことを期待しているのだと思います。

この、沿岸地域での学習を通して感じたことは、被災地の人々に向かって、「がんばって」と声をかけるのではなく、「一緒にがんばろう」と声をかけることが大事だということです。ものはあふれていると聞いていましたが、こわれてしまったものを直したり、本当に必要なものを買うために、お金は必要としているかもしれません。わたしたち二子小学校が行っていた募金活動、今までは、「助けてあげる」「何かをしてあげる」という気持ちで募金していた人も多くいたと思います。それらも大切なことですが、これからは、「共にがんばろう」「ぼくたち・わたしたちは一緒だよ」という気持ちを込めて募金してほしいと思います。

掲示委員会が今回の被災地での現地学習会の様子を壁新聞にまとめました。体育館の後ろに掲示してあります。また、みんなで撮影した写真と、参加したみんな一人一人の感想も掲示しています。各学年の発表の合間をぬって、ぜひご覧ください。

【まとめ】

「復興」という言葉を最近ではよく見、聞きする。本校でも、「復興」のため、何かをしなければと感じている児童は多くいる。実際、募金の呼びかけに反応して積極的に募金したり、プルタブを集めたりする児童が多くいた。募金額も、4ヶ月足らずで前年度の1年分の金額まで集まったり、プルタブを4Lペットボトルいっぱい貯めて学校へ持ってきたりする児童までいた。メッセージカードも一人一人心を込めて作った。

被災地のために何かをしてあげなければという児童の優しい面が、8月2日の現地学習会で、現地の様子を実際に見たり、現地の人々の話を聞いたりして状況を具体的に知ることにより、共にがんばろうという意識へと発展した。「沿岸の人たちのがんばりを知って、自分もがんばりたい」「被災地の人たちにがんばってと声をかけるのではなく、一緒にがんばろうという気持ちを持つことが大事」「助けてあげる募金から、ぼくたち・わたしたちは一緒だよという気持ちの募金」のように、自分たちのこれからの在り方についての意識を持つことができたため、今回の現地学習会は大きな意義があった。



生活科・総合 全学年	ねらい	絆⑨共感・支え合い	被災地の人々との共感的な理解を図り、思いやりの気持ちをもって、共に支え合いながら生きていこうとする態度を養う。
		絆⑩ボランティア	人と社会のために役立つことを自分から進んで実践し、人の喜びとして共感できる態度を養う。

【題材】

おいしいお米と野菜をつくろう

【関連】

キャリア教育，ボランティア教育，図書館教育，食育

【復興教育の視点】

苗植えや種まきから収穫までの米・野菜づくり，また，その販売の2つの活動を通して，働くことの苦勞と大切さを実感させるとともに，遠く離れた友達のために役立てることを考え，共に成長していこうとする態度を養う。

【実践の概要】

本校の復興教育の活動の考え方に「ふるさとに学ぶ」「交流に学ぶ」の2つの柱を置いた。1つめの「ふるさとに学ぶ」は，自分たちの住む地域にある自然や仕事・人と関わったり調べたりし，命や人，ふるさとを見つめる活動を中心に行う。2つめの「交流に学ぶ」は，交流校である吉里吉里小学校と学校単位や学年単位で教科学習に関わる交流をし，他校の友達のよさを学ぶ活動を中心に行う。

【実践の詳細】

「交流校である吉里吉里小の友達のために全校児童で何かをしたい」という児童の思いと，その活動がイベントのように単発の活動で終わるのではなく，学校で継続してきた活動を組み込んで長続きする活動にしたいという教師の思いを組み合わせることで計画するところからスタートした。

そこで，取り上げることにした題材は，これまで勤労観を育むキャリア教育，思いやりの心を育てるボランティア教育の2つの視点から行ってきた活動に，本校の研究との関連で重点指導している図書館教育を盛り込み，それを復興教育の視点から設定し直した「おいしいお米と野菜をつくろう」である。この活動のゴールには「吉里吉里小学校に図書カードを贈る」ことを設定した。

この活動は，地域に根ざした産業である農業に児童が触れ，地域に住む方々と直接関わることができる点，さらに町の教育の重点に掲げられている「食育」を推進する点からも，活動の中心として設定することはふさわしいものであると考えている。また，全校児童が集まり，高学年のリーダーシップのもと，協力しながらその役割を果たしたり覚えたりし，次の学年へ引き継いでいける活動となっていることも復興教育のねらいに合致できるものととらえている。

【活動の計画と一連の流れ】

時 期	活動内容と分担
6月初旬	田植え ・地域のお年寄りの方々，通称「お米の先生」を講師に，全校で田植えを行う。 1・2年…苗運び 3～6年…苗植え
6月中旬 ～ 8月下旬	苗植え・種まき ・地域のお年寄りの方々，通称「畑の先生」を講師に，苗植えや種まきの仕方，その後の世話や水やりの仕方を教えていただく。 1年…ニンジン 2年…大根 3年…ネギ 4年…芋の子 5年…サツマイモ 6年…ジャガイモ 全校…枝豆



〈全校による田植え〉



〈芋の子の苗植え〉



〈枝豆の種まき〉

<p>9月下旬 ～ 11月上旬</p>  <p>（六年生作成のちらし）</p>	<p>野菜収穫</p> <ul style="list-style-type: none"> ・畑の先生の指導のもと、それぞれの学年が育てた野菜を収穫する。 <p>販売</p> <ul style="list-style-type: none"> ・校内の行事や授業参観日の休み時間と放課後に日日時を設定し、保護者を対象にした野菜の販売会を行う。 1・2年…値札づくり 3～5年…販売所準備 6年…ちらし作成 	
<p>10月上旬</p>	<p>苗東ね学習会</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お米の先生を招き、3年生以上が刈った苗の東ね方を教わる。 <p>稲刈り</p> <ul style="list-style-type: none"> ・お米の先生を招き、全校で稲刈りを行う。 1・2年…稲運び 3～5年…稲刈り・東ね 6年…稲刈り・東ね・はせ掛け 	
<p>11月上旬</p>	<p>吉里吉里小学校訪問</p> <ul style="list-style-type: none"> ・4年生が大槌町立吉里吉里小学校を訪問し、交流を行い、その際に収穫したお米を贈る。 <p>感謝の集い</p> <ul style="list-style-type: none"> ・1年間の学校教育活動でお世話になった方々を招待し、収穫物を調理してふるまい、お礼と交流の機会とする。 1～3年…おにぎり 4～6年…実り汁 	
<p>11月中旬</p>	<p>お薦め本紹介カード作成</p> <ul style="list-style-type: none"> ・児童全員が1冊ずつお薦めの本を決め、簡単な紹介文を載せたカードを作成する。 	
<p>11月下旬</p>	<p>吉里吉里小学校来校</p> <ul style="list-style-type: none"> ・3年生が来校した吉里吉里小学校3年生と交流をする。地元産物であるわらび粉を使い、わらびもちを一緒につくる。 ・野菜を販売した収益金で購入した図書カードと全校児童のお薦めの本の一覧を贈る。 渡す役割…児童会執行部 	
<p>12月中旬</p>	<p>老人施設訪問</p> <ul style="list-style-type: none"> ・毎年交流活動を行っている3つの老人施設に収穫したお米を贈る。 届ける役割…児童ボランティア委員会 	



〈図書カードとお薦め一覧を吉里吉里小学校の校長先生へ〉

【考察】

これまで学校で行ってきた活動を基にしてはいるが、販売できる野菜に育てるため、その世話には予想以上に手がかかり、「畑の先生」「お米の先生」をはじめとする地域の方々に協力をいただく機会も多くなってしまった。しかし、その地域の方々のもつ「技」や、販売のために学校へ足を運んでくださる保護者の「姿」を児童が直接目にすることができ、ふるさとに学び、ふるさとを見直す有効な機会の一つになったのではないかと感じている。

〈児童代表のあいさつより〉

私たちは、昨年から吉里吉里小学校のみなさんと交流を始め、遠くはなれていても、同じこの岩手で毎日の学習と生活にはげんでいる友達のために、そして、町の復興に向けて毎日努力されている、大つちに住むみなさんのために何かできることはないかと先生方と考えることができました。そこで、できるだけ自分たちの手で行動したいという思いから、野菜を育ててそれをはん売し、得たお金で図書カードを買い、吉里吉里のみなさんにおくろうと計画しました。

（中略）

町がたくさんの本であふれることをいのっています。